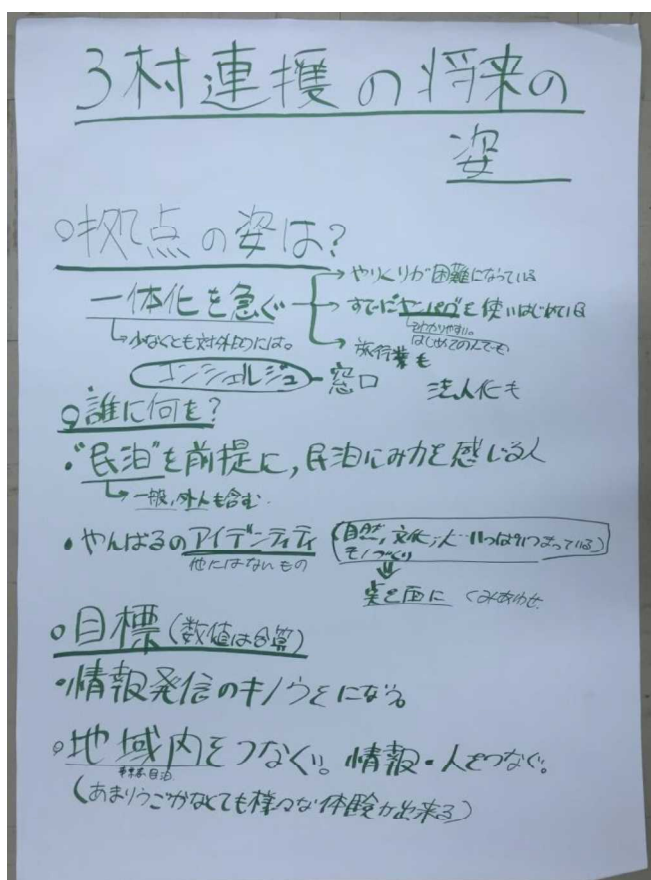


<参考：STEP1 の検討経緯>

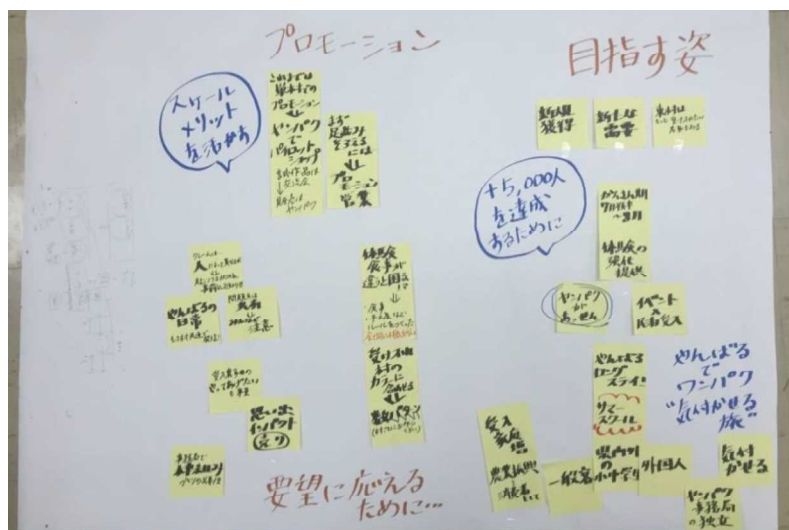
[A班]

キーワード	3村の“将来像”（目標、連携した姿）に向けた意見
受入目標	・ 3村合算での目標(数値)とする。
ターゲット	・ “民泊”を前提に、民泊に魅力を感じる人（一般、外人も含む）。
売り	・ 他にはない、やんばるのアイデンティティ ・ 自然、文化、人など、やんばるの地域資源がいっぱい詰まってるモノづくり ⇒ 様々な要素を組合せることで、点を面にする
将来の拠点の姿	・ 一体化を急ぐ(特に対外的に) - ー現状でも、単村ごとではやりくりが困難になっている - ーすでに“ヤンパク”を使い始めている ⇒ 初めての人でもわかりやすい - ー旅行業の取得も検討する ・ コンシェルジュ(窓口)を置く ・ ヤンパク事務局の法人化
役割	・ 情報発信の機能を担うこと。 ・ 地域内の民泊と事業者について、情報・人を繋ぎ、地域内で(あまり動かなくても)様々な体験ができる体制を整えること。



[B班]

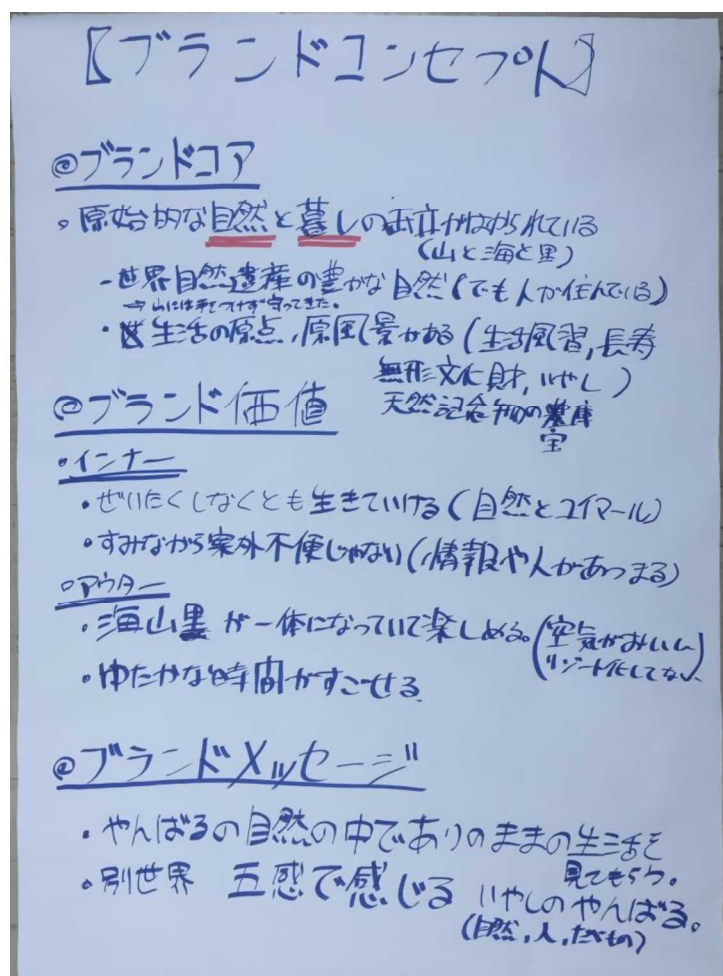
キーワード	3村の“将来像”（目標、連携した姿）に向けた意見
受入目標	・ +5,000 人を達成するために、新たな需要を開拓すること。 ・ 閑散期 7 月～8 月に受入数を増やすこと。 ・ 受入民家を増やすこと。 ・ 地産地消のもと消費者機能としても農業振興へ貢献すること。
ターゲット	・ 閑散期(夏休みシーズン)の県内外の小学生、外国人、一般客
売り	・ 豊かな自然の中でやんばるでワンパク “気づかせる旅” ーサマースクール、ロングステイ ・ 体験プログラムの強化とヤンパク事務局による斡旋 ・ イベントと民泊受入のコラボ
将来の拠点の姿	・ ヤンパク事務局の独立(法人化)
役割	・ 足並みをそろえたプロモーション、営業 ースケールメリットを生かしたヤンパク(3村連携)によるアンテナショップ等の出展 ・ 3村で連携したクレーム対応 ーやんばるの日常(起こり得る状況)を3村共通で整理し、事前に発信する ー問題点(クレーム)は共有し、みんなで注意する ・ 想い出としてインパクトに残る“売り”づくり ー3村が連携し、事務局で枠組み作りをする必要性 ー受入民家の“やってあげたい”も尊重 ⇒受入民家への波及 ・ 受入村のカラーに合わせた民泊パターンの検討・提供 ー受入民家ごとの格差の是正(食事、体験、手土産などの共通ルール) ー3村それぞれの特色が出るように(全て同じは面白くない)



<参考：STEP2 の検討経緯>

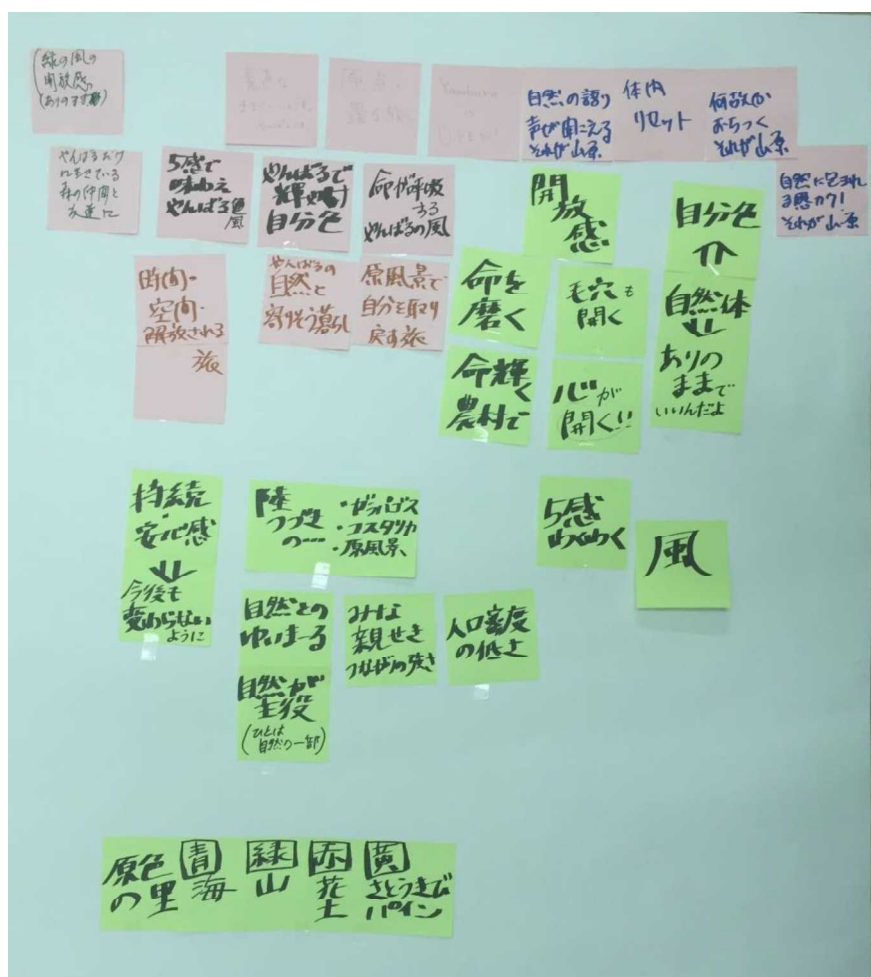
[A班]

キーワード	地域ブランド形成に向けた意見
ブランドの核 (コア)	・原始的な自然(山と海と里)と暮らしの両立がはかられている。 ―世界自然遺産の豊かな自然の中において人が住んでいる。山には手を付けず守ってきた ―生活の原点・原風景がある(生活風習、長寿無形文化財、いやし) ―天然記念物の宝庫
内的な価値	・贅沢しなくとも生きていける。自然とのゆいまーる。 ・情報や人が集まるため、住むために案外不便じゃない。
外的な価値	・海山里が一体になっていて楽しめる。 ―空気がおいしい ―リゾート化していない ・豊かな時間が過ごせる。



[B班]

キーワード	地域ブランド形成に向けた意見
ブランドの核 (コア)	・陸続きでありながら自然や原風景を持続してきた、変わらない安心感がある。 ⇒ 今後も変わらないように守り続けていく必要性がある。 ・原色の里である。 ー青：海、緑：山、赤：花・土、黄：パイナップル・サトウキビ
内的な価値	・自然が主役(人は自然の一部)。自然とのゆいまーる。 ・みんな親戚のような繋がりの強さ。 ・人口密度の低さ。
外的な価値	・心も毛穴も開く開放感。 ・五感がわくわくするやんばるの風。 ・自分色・自然体・ありのままの姿で過ごせる。命が磨かれる感覚。



<参考：STEP3 の検討経緯>

[A 班]

	「やんばるらしさ」の掘り下げに向けた意見
深く感動するポイント	• ありのままの家族一体、会話 → 本当の家族のありがたさが分かる • 良いこと、悪いことを言える素晴らしさ、ストレートな注意 → 子ども達の心に響いている • “感謝” 子どもからのメッセージ • 心のつながり → 吸収、心に浸透している • 全てを受け入れてくれること → 「帰りたくない」「ケガも良い思い出」 • お金を越えたおもてなし（食事、もてなし） → 配膳の方法など、ちょっとした知識が伝えられる • 農業と食のつながりを学べること → 食の大切さ • やんばるのゆったりとした時間、環境の不便さ
感動する理由	<核心> • コミュニティのつながり • コミュニケーション（告別式への出席者の多さで地域のつながりの強さについて知る） • コミュニティ力 → 共感を呼び覚ます

[B 班]

	「やんばるらしさ」の掘り下げに向けた意見
深く感動するポイント	<子どもたち> ・ 村民との出会い ・ 友達・仲間と一緒に体験すること、共に生活することで感動と一緒に経験できる ・ 民泊(分泊)で“個人”になり、“自分”として得られる成果がある ・ 体験から得た成果を人に評価してもらえる ・ 普段、親にはできない話ができる → 親に対しても愛情交換できることを学ぶ → いじめ、不登校など悩む時期における自立への一歩、再生のきっかけ <地元> ・ 褒める喜びと叱る切なさ → 子育てから得られる感動 → 若さ、初々しさに触れて共感する、元気をもらう <コア> ・ わずかな時間に恋におちる → 遠距離恋愛が始まる切なさを感じる ・ 民家のお父さん、お母さんと家族になる → 子どもたちは家庭の愛情を感じる → 家族が離れ離れになる“18の春” → 両親は子どもの変化を感じる ・ ひとときの、つかの間の時間に込められた“人間性、人生、ドラマ”
感動する理由	<子どもたち> ・ 手伝いを一緒に暮らすこと、おじいちゃん・おばあちゃんとの生活の実感、田舎が出来る感覚 ・ 食事の新鮮さ、田舎ならではの自給自足の生活 ・ 家族の相談や恋愛相談など、初めて親以外の大人(他人)と心が通う ・ 自分の成長を知れる「出来た!」「知れた!」 <地元> ・ 子育てしていたころを思い出すこと ・ かわいい子ども、孫に会える感覚 ・ 相談相手になる、話を聴いて心に寄り添う時間をもつこと、アドバイザー・メンターの役割を担い成長を見守ること ・ 子どもたちからの気づき、沖縄のことを新たに知ること → 地元の知らないところに気が付く → 話題性の豊かさ、生活・文化について話すことが楽しい → 子どもたちを迎えるために、地元のことを勉強する <コア> ・ 笑顔 ・ 別れのさびしさ ・ 先生もエージェントにも、伝播する感動

(3) その他実施事項

「ヤンパク」による共同PRイベントを実施するとともに、「体験交流プログラム」の受入連携や、民泊農家さんのネットワークづくりを意識した交流会(全体ワークショップ)を実施した。

1) おきなわ花と食のフェスティバル

農林水産業に対する県民の理解促進、消費拡大、生産振興を目的としたイベント「おきなわ花と食のフェスティバル 2016」に「ヤンパク」としてブース出展を行い、やんばる3村の産品や体験のPRを行った。

① イベント概要

日 時	平成 28 年 2 月 6 日 (土)、7 日 (日) 10:00~18:00
場 所	奥武山公園
主 催	おきなわ花と食のフェスティバル推進本部
参加者	(目標) 16 万人

② 出展結果

試食、試飲、販売を行い「パインジャム」「ナントゥー」「パインドレッシング」などが売れ筋だった。



図2-29 おきなわ花と食のフェスティバルの様子

おきなわ花と食フェスティバル2016(案)

2018年2月6日(土)・7日(日)

やんばる交流推進連絡協議会

1 出店予定内容

展示・配布	販売商品(加工品)	価格	数量	青果物	数量	試飲	試食
各村のパンフレット	パインジャム(東)	500円	24				パインジャム(クラッカー)
村PRポスター	パイン缶(東)	500円	24				
民泊・体験写真展示	パイン入ドレッシング(東)	500円	24				
イベント情報(チラシ)	からぎ茶(国頭)	500円	30			からぎ茶キーパー(ホット)	
	からぎ茶Tパック(国頭)	600円	10				
	ナントウ餅(国頭)3個入り	300円	200				
	シークワサー蜜(大宜味)	800円	400			シークワサー蜜(ホット)	
	乾燥パイア(やんばる交流)	300					乾燥パイアサラダ

*3村の道の駅等で売れ筋(人気)商品ベスト3

1 体験

体験名	体験内容	特色	体験
コスメ体験 オーガニックの化粧水 国頭村	月桃・ヨモギ・からぎの香りをベースに椿(花・種・葉)・ハイビスカス水で化粧水を作ります。	やんばるの森で採れた植物から抽出したエキスをオリジナルの手作り化粧水です。	2,000
バードコール作り 東村	鳥の音を出す道具の事で、鳥笛とも呼ばれます。木片とボルトを使って簡単に作ることができ、この木片と金属棒をこすり合わせて出す音が鳥の鳴き声に似ていて、この音で鳥が集まってくるのを楽しむという道具です。	やんばるの木材を使用しています。ヤンバルクイナやノグチゲラが集まってくるかも。	500
貝殻ランプ作り 大宜味村	サンゴや貝殻、シーグラスを使ってオリジナルなランプシェードを作ります。	世界に一つオリジナルなランプシェード。ロウソクを灯したり、アロマキャンドルを灯しながら憩いのひと時を味わうのもおつなもの	2,000

図2-30 おきなわ花と食のフェスティバル出展内容

おきなわ花と食のフェスティバル 2016

インフォメーション「いなか体験」

～都市農村交流情報コーナー～ 場所：ブース⑤

いっぱいあるよ
好奇心くすぐる
体験

田舎でまってるヨ!

2月6日(土)
協力: みなみの味グリーン・ツーリズム

ハーブピネガー作り体験

参加費 1000円

2月7日(日)
協力: 自然体験学校(沖縄校)

ススキのサン作り体験

参加費 無料

2月6日(土)・7日(日)
協力: やんばる交流推進連絡協議会(ヤンパク)

コスメ体験
オーガニックの化粧水作り

参加費 2000円

貝殻ランプ作り体験

参加費 2000円

バードコール作り体験

参加費 500円

参加費 フルーツハーブティーの淹れ方教室
500円

参加費 さとうきびエコはがき作り体験
300円

協力: 結ぐにかみ

協力: ふれあい体験(無料)

協力: 東村観光推進協議会

ポニー乗馬体験

体験費 500円

協力: うちなーファーム
(糸満観光農園)

いさあけ体験

体験費 200円

会場地図

少年野球場
沖宮
弓道場
多目的広場
モノレール 奥武山公園駅

問い合わせ: 沖縄県農林水産部・村づくり計画課
TEL: 098-866-2263

図2-31 おきなわ花と食のフェスティバル体験ポスター

2) 沖縄地域子ども農山漁村交流プロジェクトセミナーへの参加

今後推進を図る、「子ども農山漁村交流プロジェクト」に係るセミナーに参加し、3村の受入農家も含む形で、受入対応に対する理解を進めつつ、受入農家間の交流を図った。

①目的

「子ども農山漁村交流プロジェクト」は、農林漁業体験や宿泊体験、地域住民との交流を通じて、子どもたちの生きる力を育むとともに、交流の創出による地域再生や活性化を目的として取り組まれている。

沖縄県においても、特に北部地域は「子ども体験交流プロジェクト」の取組み先進地域であり、県内で優良事例として期待されています。しかし、県内では教育現場とのマッチングが推進上の課題となっており、地域性を活かした受入を具体化していくことが求められています。今回のセミナーが子どもたちの体験プログラムを考える機会とする。

②イベント概要

日 時	平成 28 年 3 月 4 日（金）18:00～21:30
場 所	大宜味村農村環境改善センターホール
主 催	沖縄県地域「子ども農山漁村交流プロジェクト」推進連絡会
後援	一般社団法人全国農協観光協会
対象	受入地域団体会員(合同会社結くにながみ、NPO 法人おおぎみまるととツーリズム協会、東村観光推進協議会)、自治体職員、教育委員会職員、学校教職員、教育や地域づくりに関心のある方等
募集人数	第 1 部 100 名 第 2 部 30 名(各団体から 10 名ずつ参加者を指名)

③実施内容

<第一部>

- 1 あいさつ(18:00～18:05)
内閣府沖縄総合事務局農林水産部土地改良課農村活性化推進室
- 2 子ども農山漁村交流プロジェクトの概要説明(18:05～18:20)
全国農協観光協会子ども交流プロジェクト出口事務局長
- 3 基調講演(18:20～19:10)
「農村の活性化をめざしたグリーンツーリズム
～吉四六さん村が取り組む子ども体験交流プロジェクト～」
講師:大分県臼杵市吉四六さん村グリーン・ツーリズム幸義子氏
- 4 質疑(19:10～19:25)
- 5 閉会(19:25～19:30)

<第二部>

- 1 趣旨説明(19:45～19:55)
・テーマの説明「やんばるの体験で子ども達が行われるものは？」
- 2 ワークショップ(19:55～20:55)
- 3 総括(20:55～21:00)
- 4 閉会



図2-32 沖縄地域子ども農山漁村交流プロジェクトセミナーの様子

2. 4. 3 今後の連携方針

農山漁村体験を軸としたヤンパクの活動については、本年策定した「行動計画」に基き進めていくこととなった。

一方で、3村の連携組織として、行政や商工会、JA などが参加する「やんばる交流推進連絡協議会」が存在しており、同主体の活動内容との活動のすみわけが必要である。現在、同主体の事務局の業務を、3村の団体が持ち回りでやっているが、定例の会合や一部事務を除くと、現在考えているヤンパクとしての活動と実質重複しており、ヤンパクの事業自体が公益性の高いものであり、今後も行政との協働が望まれる。

特に世界自然遺産登録や森林ツーリズム等の取組が活発化してきており、これらの取組との調整が必要となっている。これについては、行政との協議を通じた活動の整理が行われる方針である。

3村連携を沿革に進めるために、「やんばる交流推進連絡協議会」の事務局業務をヤンパクとは分け、地域内の各部門の調整能力が高い行政やそれに準じる組織が関与することが望ましいと考えられる。